

鈴木三重吉

漱石先生の書簡

漱石先生の書簡
(談)

先生は純情な、正直な、規帳面な人だっただけに、ひとからの手紙に対しても、一々克明に返事を出されたものである。いつの年の冬のことであつたか、たしか或雪どけの日に、南町のお家へ伺うと、先生は茶の間の縁側にこごんで、十二、三ぐらい？ うすぎたない着物を着た、そこいら近所の子どもらしい少年に、英語の第一リーダーを教えていられた。先生は、胃がいたいと見えて、元氣のない顔をしていられたが、でも、語気や態度には、

ちっとも面倒くさそうな容子もなく、丁寧に、訳解してやっけていられた。少年がかえってから、どこの子ですと聞くと

「どこの子だか、英語をおしえてくれと言ってやって来たのだ。私はいそがしい人間だから今日一度だけなら教えて上げよう。一たいだれが私のところへ習いにいけと言ったのかと聞くと、あなたはエライ人だというから英語も知ってるだろうと思って来たんだと言ってた。」

先生はこういう意味のことを答えて微笑していられた。

すべてこういう態度の先生は、田舎の下らない青年なぞが、つまらないことを言っ
て来ても、先生は必ず一々返事をかいて、必要により教戒もされたり、慰い藉しやされたりしたものである。

先生がなくなられてから、奥さんが、これを処理しておいてくれと、書棚の引出しから出してわたされた一と束の手紙を見ると、それは、地方の青年なぞからよこしたもので、病中だったりして、返事を出さなかつたのを、気にして、別にとっておかれたものであった。

そのくらいだから、門下のものや先生のところに入

したことのある人たちが、めいめいの煩悶を訴えたり、感想や議論を述べて来た場合なぞには、しばしば長い手紙をいとわずかいて、慰撫したり訓諭したり、教導されたのはいうまでもない。書簡集には、そういう応答の書簡の数が多く見られる。かけ出し当時の私のために、文芸に向う態度について、二通つづきの手紙で諭された手紙のごときには、直ちに先生の文芸作家として立っていられた根底の心情の一面も窺い得られて悲壮である。ついでながら最初この書簡集をまとめるとき、人々から呈出された先生の手紙の中で、公開してはその御当人のた

めに迷惑になりそうなことは、注意して部分部分に伏せ字を入れたりして礼儀をつくしたのであるが、少くとも小宮や草平や私の三人と、奥さんとに關しては、先生その人の陰影を出来るだけ残しとどめる意味からも、すべてを削除せず、どんな手紙もあけすけに入れたものだ。従ってお互の子供等が大きくなって読みでもすると、親爺として甚だきまりのわるいことも沢山あるが、どうもこれも天罰と見るより外はあるまい。

先生について話せば限りもない。要するに先生は、深い学問と教養とを備えた、人格的高士である。先生の

芸術家としての価値は、作品を読めば量られるが、先生の人格者としての偉大さは当然作品だけでは窺いつくすことは出来ない。先生の作品は、そのことごとが、先生の人物、人格の直面的な展開ではないからである。人々が先生の「人」を知るには、この書簡集より貴重な材料はない。先生は手紙でも、面語めんごと同様に、飾らず偽りなく、親しいものには、何でもぶちまけてかかれたので、先生が、自己を語られた記録として、このくらい赤裸々な、真実なものはない筈である。

書簡の性質上、だれの書簡集についても、そういうこ

とが言えようが、先生の場合においてはその表われが全人格的に出ている。先生はカミシモを着ないで、平服で対している。

人々はこの集において、偉大な、温情的な先生に面接し得る点において、永久に、多くの教訓と慰藉と、啓発とを、自分自身への与えられとして受取り得るに相違ない。一つの貴い典籍と言ってさしつかえないであろう。

（『漱石全集』（昭和三年版）月報第六号（昭和三年八月））

日本文学電子図書館

漱石先生の書簡(談)

著 者：鈴木三重吉

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館